

応答詞「そうですね」の機能について

On the Functions of “SOODESUNE”

小 出 慶 一*

Keiichi KOIDE

1 はじめに

1.1 問題の所在

この稿で考えたいことは、対話に現れる「そうですね」の成り立ちと機能である。「そうですね」には、少なくとも次のような2つの性質の異なる用法がある。

- 1 1 : そうするとわりかた短いシリーズ。
2 : そうですね。もう本当にあの一そうですね。4、5日通勤すると終わるかなと言うような（1 : ああ）長さです。（Ysfⁱ）
- 2 1 : ああ、でもこれぞという18番はありますか？
2 : これぞは、そうですねえ、スパゲッティは好きですけども（1 : ああ）色々作ります。（NFm）

1の「そうですね」は、相手の問いかけの内容に同意するものである。さらに、「そうです」と置き換えることもできる。それに対して、2の「そうですね」は、同意とは言えないし、「そうです」に置き換えることもできない。この2の「そうですね」は、吉村（2000）が「耳障り

なほど頻繁に使われている」と言うように、TVのインタビュー、対話などでは日常的によく耳にする表現である。ⁱⁱ

「そうですね」のこの2つの用法がどのような関係にあるのかが主たる関心事であるが、その検討のために、その2つと「そうです」とはどのような関係にあるのかについても検討を加える。箇条書きにして示せば次のようになる。

- 3 a. 「そうですね」はどのような性質、機能を持つのか。
b. 「そうですね」と「そうです」はどのような関係にあるのか。

1.2 本稿の構成

以下、2節では、「そうですね」の先行研究について検討する。3節では、「そうですね」の検討に先立って、「そうです」の機能を検討する。4節では、「そうですね」の用法を2つに区分した上で、そのうちのひとつ（この稿で「そうですねA類」と呼ぶもの）について検討し、5節ではもう一つの区分である「そうですねB類」について検討する。最後に、6節で、「そうです」と「そうですねA類」「そうですねB類」の関係、「そうですねA・B類間」の関係について考察する。

* こいで・けいいち
埼玉大学教養学部教授，日本語教育

2. 「そうですね」についての先行研究

「そうですね」をテーマにした先行研究は、管見の範囲ではあるがかなり限られている。その中の2編について、その論点、問題点を述べる。

2.1 吉村 (2000)

吉村 (2000) では、「そうですね」を、「〈質問-応答〉ペアにおける"ショック・アブソーバー"の機能を果たすもの」とする見方が提案されている。

- 4 質問者からの問いかけに対し、間髪をいれず応答を開始する圧力がかかる。テレビやラジオでのインタビューなど公共性の高い事態では、その要請はいよいよ強くなる。ところが、何らかの事情で、質問にフィットする発言が行いにくい場合には、態勢を立て直すためのフィラーが必要になる。(略)「そうですね」はそうした事態で多用される。したがって、このことばは、応答時のショック・アブソーバー(緩衝装置)の機能を担っていると提案したい。(p.4)

応答に手間がかかる時に、「間」ができてしまうことを回避しつつ、また、他からの要請を受け止め、その圧力を緩和するものとして「そうですね」が機能するという見方である。

そして、このような機能を持ちえたのは、「そうですね」が強い限定的な意味を持たなかったからで、“肯定から弱い否定まで”の幅広い受け止め方ができることによって、「ショック・アブソーバー」機能を持つに至ったと説明している。また、自分が話したいことを相手が質問してくれないような時に、「そうですね」は内容の調整装置として機能し、それが、TVなどの解説者

の多用の背景にあるとも述べている。

吉村は、「そうですね」の本来の機能として「肯定の応答」という機能を想定し、その「肯定」の機能が希薄化して、否定応答の冒頭にも使えるようになったとしている。因みに“弱い”否定応答というのは、次のように一般疑問文ⁱⁱⁱに否定的に答えるものと思われる。

- 5 A: どうしますか、これから行ってみますか。
2: そうですね、時間もなし、今日はやめておきます。^{iv}

“応答時のショック・アブソーバー”という見方は興味深い、一種の比喩であり、その内容は必ずしも明らかではない。また、「そうですね」が本来的に肯定を表わすと言語できるかは議論のあるところであるし、また、例2のような「そうですね」をフィラーとしていいのかなど、検討すべき点は残されている。

2.2 齊木 (2008)

齊木 (2008) では、「そうですね」の用法区分、意味、機能などの論点が表示されているが、それらを箇条書き的にまとめると次のようになる。

- 6 a. 「そうですね」には、応答用法、フィラー用法の2つの用法がある。
b. 応答用法の場合、『そうですね』の終助詞『ね』の付加および交代は意味に変化を与えないが、フィラー用法の場合、終助詞『ね』は必須条件であり、『ね』以外の終助詞への交代は不適格になる。(p.52)
c. 「そうですね」は、相手の発話内容を引き受け、そのテーマで話を続けるという

意思表示をするものである。また、その内容形成のための余裕を作る間繋ぎでもある。

- d. 本来、「そうですね」は、「はい」「その通りです」という意味を表すものであったはずであるが、フィルター用法にはもはやその意味はなくなっており、(…) フィルター用法の「そうですね」は、意味機能的レベルでも、文法化されたと考えられる。(p.50)

6aの用法区分については、用法を2つに分ける点については、本稿も異論はない。しかし6bの「ね」の有無は意味を変えないという点、「そうですね」をフィルターとする点については、議論が必要だろう。また、「そうですね」が“相手の発話内容を引き受ける”ということについて、部分的には賛成するが、しかし、なぜ6cのような意味機能を持ちうるのかについては触れられないままである。6dの機能拡張の見方も含めて、以下に検討したい。

3. 「そうです」の意味・機能について

「そうですね」を考える前に、「そうです」について見ておきたい。前節で紹介したように、齊木は“応答用法”の「そうですね」では、「ね」は取り去ることができると述べている。確かに、例1では、「そうですね」も「そうです」も成り立つ。しかし、「ね」がなくても成立するということと、意味が同じであるかどうかは別の話でもある。そこで、まず、「そうです」の意味はどのようなものかを確認しておきたい。

3.1 先行研究

ここでは、先行研究の例として、アプローチの異なるものを2つ挙げる。^v

3.1.1 岡本・多門 (2003)

まず、岡本・多門 (2003)。この論文は、先行研究の検討と独自の調査をもとに、「そうです」が自然になるための条件を考察したものである。そして、その条件として次の3つを挙げている。「そうです」使用の最低条件は、この3つのうちのいずれかを満たすことであり、この3つを充たす度合いが高まるほど自然さが増すとされている。

- 7a. 形態的な当てはまりがよいこと。つまり、「そう」が、質問提示の一部の代用となっていること。
- b. 提示者(質問者)が判断を示す文への応答であること。「そうです」は、提示者の判断を応答者が肯定する場合に用いられるもので、そうでない場合は不自然になる。
- c. 提示がカテゴリー的であること。つまり、「花子は学生か」という質問のように、「花子」が「学生」というカテゴリーに属するかを問う構造を持っていること。

7aは、名詞述語文、ノダ文での質問に応じやすいということであるが、7bについては、次に紹介する内田(2008)の議論ともかかわるので少し説明を加える。

7bで言われる判断提示文とは、話者の判断の当否を尋ねる文とされる。発話の中には、判断を持つ文と持たない発話があり、依頼や意向打診などの判断のない文に対しては、「そうです」は使えない。さらに、名詞述語質問文でも、判断提示でない場合があり、その時は「そうです」が使いにくくなるというわけである^v。

判断提示文の例は挙げられていないが、恐らく次のようなものだろう。

8 A : 太郎はその時どうしましたか。呼びましたか。

B : そうです。

8は、名詞述語文ではないが、「そうです」で答えることができる。それは、Aの質問が、「その時太郎がしたことは、叫ぶことで、それ以外ではない」という判断について、その当否を聞いている文だからであり、このとき「そうです」が使えるというのである。

しかし、岡本・多門の見方には、少なくとも2つの問題があるように思われる。

1つは、判断提示でない質問にも、応答に「そうです」が使われるように思われることである。8の例について言えば、「呼びましたか」は可能な選択肢の1つを示しているだけで、判断が提示されていると言えるか微妙である。何を判断とするかの定義の問題でもあるが、質問文の中には、このように自らの判断の当否を問うものでないものもあるのではないかというのが疑問のひとつである。

2つめは、7cともかかわるが、「そうです」で答えられる質問文がすべて、あるカテゴリーへの所属を問う質問文と言えるのか、という点である。これも、カテゴリー性というものの規定がないので、この指摘が妥当なのか判然としないのであるが、常識的な意味で考えて、8のAの発話に“カテゴリー性”を見出すのは困難に思われる。

3.2 内田 (2003)

内田 (2003) は、いわゆる一般疑問文を取り上げたものであるが、述語の品詞に関しては、名詞、ノダ、動詞いずれでも「そうです」での応答が可能であるとしている点は、岡本・多門と同様である。しかし、9にあるように、「そうです」での応答が可能かどうかは、質問の焦点

の性質によっており、かつ、この条件のみで決まると考えている点で異なる。10がその例。

9 「そうです」で答えられる質問文だけが求める情報は、質問の前提における未定部分 [X] について質問者が立てた仮説【[X]は候補 [Y] だ】に対する肯定または否定の判定である。(P.49)

10. a : その本、買ったんですか。

b : そうです。(P.41)

10の質問文は、「その本はbが[X]た」という“前提”を持っている。そして、この[X]は未定の項であるが、その候補は「買う」であるとして、【「その本はbが[X]た」の[X]は「買う」だ】という仮説を提示し、この仮説の肯否判定を求める、これが10aの文の意味であるとする。そして、質問がこのような意味を持っているとき、「そうです」が可能になるというわけである。それに対して、「そうです」で答えられない11a、bのような文については、12のように説明している。

11 a . 「高かったですか」 「??そうです」

b . 「もう読み終わりましたか」 「??そうです」

12. 「そうです」で答えられない質問文の場合、未定部分 [X] には述語の表す概念が肯否を選択するかたちで存在しており、質問者にとってこの「X」は、「どちらなのか」という意味で不明である。そして、[X]は、肯否どちらかの概念が選択されることによって確定する。(PP.46-7)

つまり、質問文の中の選択肢を選択することだけが問題になっている場合は、「そうです」では答えられないということである。「そうです」

で答えられるのは、質問全体が、ある前提に対する話者の仮説の当否を問う構造になっているときだけ、というわけであるが、選択提示あるいはカテゴリーなどという道具立てを用いずに説得的な説明がなされているのではないと思われる。

しかし、このように考えるならば、11の場合に「そうです」で答えられない理由の説明は、質問の焦点の位置という観点から検討されるべきもののように思われる。また、「そうです」が必ずしも一般疑問文にのみ応答するものではないという点についての検討も必要のように思われる。また、岡本・多門についても述べた点であるが、9、12の引用にあるような“仮説”解釈になるか、“概念”の肯否解釈になるかは、受け手の側の問題であり、質問者側の問題ではないようにも思われる。

3.3 「そうです」の機能

そこで、「そうです」が質問文以外の応答に使われたものを見てみる。

13. A：明日は休みですよ。

B：そうです。

14. 「噂なんぞは、そのまま本気にできないと私は思います、無責任に事実を脚色するのが平気な人もいますから」

「そうですとも。私だって決して全部を信じようとは思いませんよ」(『伸子』ⁱⁱⁱ)

15. A：早く、帰りなさい。

B：そうです。もうこんな時間ですよ。

ここでの「そうです」は、確認(13)への同意、主張(14)あるいは他者への指示(15)への同調、を表していると言えるだろう。そして、同意・同調とは何かと言えば、相手の発話内容、発話行為を肯定するということであり、「○○さ

んの言うとおりに」ということである。

これを図式化して書けば、13～15のBは次のように「XはYだ」の形に書ける。

13'. 明日について、Aが言っていることは、その通りだ。

14'. 噂について私の言いたいことは、あなたの言っていることだ。

15'. 今私が言いたいことは、Aの言っていることだ。

内田が「そうです」で答えられないものの例として挙げた「もう読み終わりましたか」についても、次の11a'、b'のように、「XはYだ」の形での解釈が可能であれば、「そうです」は適格になる。

11 a'. 買わなかったということは、高かったということですか。

b'. 本を本棚に戻したということは、もう読み終わったということですか。

この前半の破線部は、文脈から取り込まれたものでその時の文脈によって変化する。

逆に、この構造を取れないものは、「そうです」では答えにくいことになる。

16 a. (申し出)

「手伝いましょうか」「*そうです」

b. (誘い)

「昼食に行かないか」「*そうです」

先行発話を、あるコトガラ(X)についての記述(Y)として形で捉えた時、つまり、「XはYだ」という内容を持つと捉え、それが妥当であると判断する時に、「そうです」という応答が成立するわけである。

このXは、明示的ではなく、文脈から持ち込まれることもある。11 a を例にとれば、「高かったですか」と質問された側（受け手）は、何について言われているか文脈から探す必要がある。その時、受け手がその質問を「買わなかった（X）」ということは、高かった（Y）」ということか」という質問なのだ解釈すれば、「そうです」と答えることになる。このような解釈が得られなければ、「はい、高かったですね」などと答えることになる。

「そうです」の持っている認識の構造は、「そう」についての串田（2002）の分析とも共通するところがある。

17 「そう」とは、直前の相手の発話が、自分の発話計画に対して独自の貢献をしたことを認定するために利用可能な道具である。この道具を用いることで、相手の発話は、「自分の計画に沿うものの自分では十分な形で言わなかったこと」を「代弁」したものとして認定される。それゆえに「そう」は、相手の貢献を自分の発話計画に組み入れる形でさらに発話を継続しようとするときに、その前置きとして利用できる。（p.23）

「そうです」の機能をまとめると次のようになる。

18 「そうです」は、先行する発話が、「Xは、Yだ」という構造に解釈されるときに、その認識を肯定するものとして言われるものである。

X部分は話し手の認識する状況あるいは問題であり、非言語的状況もあるし言語化された内容である場合もある。Y部分が先行発話の持つ

内容的な面、行為的な面など、適宜取り込まれることになる。このような解釈を行うのは、受け手の責任であり、それによって応答の形式は変化することになる。

4. 「そうですねA類」について

次に「そうですね」について考える。

4.1 「そうですね」の2つのタイプ

1.1 で述べたように、「そうですね」には2つのタイプがある。1つは、意味的に同じかどうかは別にして、「そうです」と置き換えが可能なもの（例1）、もう一つは、置き換えができないもの（例2）である。ここでは、仮に、前者をA類、後者をB類と呼んでおくことにしたい。斉木（2003）のように、それぞれを応答用法、フィラー用法と呼ぶのが妥当か、その点はのちに検討したい。

4.2 「そうですねA類」の性質

斉木（2003）では、「そうですねA類」は、「ね」があってもなくても意味は変わらないとされていたが、まずこの点から見てみたい。つまり、「そうです」と異同はあるのかということである。

まず、名詞述語の一般疑問文について、「そうです」と比較してみる。

- 19 a. A: あなたは田中さんですか。
田中: *そうですね。 / そうです。
b. A: あなたのお住まいは、横浜ですか。
B: *そうですね。 / そうです。
c. A: 平成元年は、西暦1989年ですか。
B: ?そうですね。 / そうです。
d. A: 円周率は3.14159265ですか。
B: ?そうですね。 / そうです。
e. A: ナスは切るんですね。

B: そうですね。 / そうです。

高	低	低
↑	↓	↓
「そうですね」低	高	高

19 では、「そうです」での応答は、どの質問に対しても可能だが、「そうですね」は可能なものとそうでないものがある。

たとえば、自分の名前 (19 a)、自分の住所 (19 b) など、その人の個人的領域への質問に対する応答では、「そうですね」は不自然に感じられる。それに対して、和暦 (元号) と西暦の換算 (19 c) や、円周率の記憶検索 (19 d) など、自分の領域を離れ、かつ、回答に手間のかかる質問になるほど、「そうですね」の自然さは高くなる。

これらに対して、19 e は自らの調理法を問われた場面であるが、自らの調理法でもあり、直接形「そうです」で答えてもいいのであるが、対人的な配慮によって領域性が薄められれば、「そうですね」が選択されることも可能になっている。

「そうですね」「そうです」の双方が選択な場合において、その選択に何が影響するかという点に関しては、ここまでの議論からは、領域性、回答のための心的負担、対人的配慮という3つの要素が関わっていると考えられる。ただし、この3つは、それぞれ独立した要因ではなく、相互に関わりあう面も持つと考えられる。専門領域性が高ければ、回答のための負担は小さくなるし、他人の知識量を付度するような対人的配慮も必要になる、というようにである。図式的に書けば、「そうです」「そうですね」の両形が選択可能な場合における選択要因は次のようになる。

20. 「そうです」「そうですね」双方が可能な場合での選択要因

「そうです」領域性・心的負担・対人配慮

このような「そうですね」の性質から、次のような場合に、「そうですね」が選択されるのではないかと思われる。

21 a. A: 平成元年は1989年ですか

B: (頭の中で換算して) ああ、そうですね。

b. A: 田中さんのお宅は、横浜ですか。

B: (記憶を探りながら) そうですね。

c. 小学1年生: 先生、できました。2 たす3は5です。

先生: そうですね。よくできましたね。

「平成元年は1989年ですか」という問いかけに対して、「そうですね」という答えが許容される場合とされない場合がある。許容されない場合は、「平成元年は1989年である」という命題の成否のみについて答える場合である。この命題が成立するということを認める場合には、「そうです」が選択される。文中の情報と百科事典の情報の一致のみが問題になる。

それに対して、「そうですね」という応答が許容される場合は、話者自身が「平成元年は西暦だと何年になるか」という計算をして、その答えが一致したというような場合である。このとき、「そうですね」が表わしているのは、命題の成否だけではなく、相手の問いについて、自身が認知的活動 (検索、計算、推論など) を行い、その結果、相手の問いの対象である命題と同様な結論を得た、その一連の事象であるということの表示である。「そうですね」が、「そうです」と異なる点は、「命題の成否」についての判断を

示すことが中心ではなく、判断に至るまでの話し手の心的な過程の存在が示されるところだと思われる。この心的過程の存在がない場合、あるいは認められない場合には、「そうですね」は現れないのではないかとと思われる。

「平成元年は 1989 年か」という問いは、知識の単純な照合にもなるし、計算問題にもなるので 2 通りの答えが可能になったが、「あなたは田中さんですか」というような知識照合だけの問題には、通常は「そうです」しか現れないだろう。もし、「そうですね」が出たとしたら、それは、応えたくないような場合であり、それはまた、知識照合以外の心的な過程を反映していることになる。

また、「2 たす 3 は 5 ですか」という質問は成人にとっては容易な計算で答えを得ることができるが、小学校の先生の言う「そうですね」は、同じ心的な操作を行ったという共感を含めた表現にもなっている。

ところで、以上は「そうです」「そうですね」双方が使用可能な場合についてであったが、「そうですね」だけしか使えない場合もあるだろうと思われる。「そうですね」の用法を考えるためには、その広がりを見ておく必要もあると思われるので、その点について簡単に触れておきたい。

まず、「そうですね」は、相手から自分に向かって何らかの反応を求める行動があったときの反応の一つと言えると思うが、「そうですね」の反応がまったく許容されないのは、ごく限られていて、上にも述べたように、自身の領域内の優先的にアクセスできる情報について問われたときには「そうですね」が不自然であるが、それ以外は、相手の問いかけを受け止めるという点ではほぼ制約がない。その点では、「そうですね A 類」にも、一種のショック・アブソーバー的な機能が認められることになる。ただし、相

手の発話を拒絶しないということで、いわば消極的な受け入れである。これは、「そうですね B 類」のところでも述べるが、「ね」の対自的な性質によると思われる。「そうです」は相手の発話を受ける対他的なものであるが、「ね」はここでは対他性がなく、対自的になっている。そのために、多くの発話を受け入れることが可能になっているのである。吉村(2000)が言うような、「肯定機能の希薄化」のためではないと考えられる。

なお、付け加えれば、「そうですね」で応答できる先行発話は、相手から回答を求められるタイプの発話に対して、それが自己領域、常識的領域に属するものでなければ、述語の形式にかかわらず応答が可能である。相手から回答を求められるタイプの発話とは、一般疑問、事実確認などである。依頼や許可求めに対する「そうですね」は、「そうです」との代替ができないので B 類である。

以上のようなことから、「そうですね A 類」の基本的な性格を次のように考えることにしたい。

22 「そうですね A 類」は、先行発話に対して、話者の解釈あるいは回答のための一定の心的負担を含む応答に用いられる。そのような過程を含まない場合には現れない。そのため、自身の固有の領域に属する情報については、「そうですね」は使いにくいことになる。ただし、領域性については、対人的な配慮から棚上げされることもある。

また、先行発話に対して自身の心の中で反芻するなどの過程を含むことから、協調的な姿勢を示すことにもなる。さらに、そのことによって、肯定・否定の姿勢があいまいになることもある。

5. 「そうですねB類」について

次に、「そうですねB類」について考える。

5.1 談話における特徴

「そうですねB類」は、1.1節で見たように、先行発話の命題的内容にはかかわらない。この点はA類と異なる点である。B類では、内容的な側面が希薄になっていて、その分、談話形成にかかわる側面が強くなっている。ターンの保持、交代という観点から見たとき、その特徴として、次の3点が挙げられる。

- 23 a. 相手の発話を受けて発せられる。
- b. 発話権を持つ場合にのみ出現する。あいつちの「そうですね」はB型ではない。
- c. ターンの冒頭だけでなく非冒頭位置にも現れる。

A類と共通しているのは、23 a だけである。23 b について言えば、A類は、発話権を持たない場合にも現れることがある。「あいつち」がそれであるが、この「あいつち」用法はB類にはないものである。また、23 c は出現位置についてであるが、B類もターンの非冒頭位置に現れることもあるが、それは、後述するように、話題の捉え直しとして機能するもので、B類独特の用法である。

5.2 どのような発話を受けるか

まず、B類はどのような発話を受けて現れるか、この点を見てみたい。

いくつかを例を挙げれば、次のようなものである。

24 a. (意向質問)

A: 明日の講演会、行きますか。

B: そうですね、行かないと悪いかな。

b. (依頼)

A: 明日、ちょっと手伝ってくれないかな。

B: そうですね、明日ですか……。

c. (提案)

A: 明日、映画に行きませんか。

B: そうですね、……。

d. (判断求め)

A: これでいいですか。

B: そうですね、……。

ここに挙げた先行発話の共通点は、受け手に対して、受け手の感覚、感情、意見、意向などの言語的な表出を求めることである。ここで言う表出とは、単なる知識の表現ではなく、話し手固有の認識、思想、感性に基づいた、リアルタイムでの心的様相の表現とでもいったことである。

25のような情報伝達的なやりとり、あるいは、26のような行動的な反応を求める発話に対する反応としては現れにくい。このような場合には、「そうですね」ではなく、25なら「えーと」、26のような場合には「はい」などが使われることになるだろう。

25 a. A: 君の学生番号は何番ですか。

B: *そうですね、学生番号は……。

b. A: 卒業式は21日ですか。

B: ??そうですね、たしか21日だと……。

26 a. (指示) A: そこで止めてください。

B: *そうですね……。

b. (注意) A: そこ、入らないでください。

B: *そうですね……。

5.3 「そうですねB類」の機能

次に、B類がどのような働きをしているかを見てみよう。

斉木(2003)は、隣接ペアの第2発話に「そうですね」が現れることに注目し、「そうですね」が先行発話の話題を“引き受ける”ものであると述べている(6c参照)。しかし、この“引き受ける”ということがどのようなことか、いまひとつ明確ではない。が、この稿でも、ひとまず、この先行話題を受け取るという点については、同様に考えておくことにする。では、その受け取りとはどのようなことかということになるが、これを考える手がかりとして、ターンの非冒頭位置に現れる「そうですね」に注目してみたい。

27 1: そうですか。はい。ええと、曜日の方はそれでいいでしょうか?

2: 土、日、月、火、そうですね、土日どちらか出来たら休ませて欲しいんですけども。

1: そうですか、やっぱり(2:へへ)(…)(北 TAm)

28 2: はい、(1: ええ) ええ、と、わたくしー、は、ずっとあの一、学校一に、(1: はい) 勤めて一、参りまして、(1: はい) あ教師をずっとしてまわりまして、(1: はい) あ一、そうですねえ、え一、高校の教師が、(1: はい)、う、一番長かったんです、(…)(TN f (新村))

27では、「そうですね」は「土、日、月、火、そうですね、土日」というように、まず「日、月、火」と提示しておいてから、改めて「土日」が選択され、「休ませてほしい」曜日として示される。28では、「教師をずっとして」いたとい

うことが、「そうですね」の後で、より正確に、改めて「高校の教師が一番長かったんです」というように言い直され、捉え直されている。

つまり、「そうですね」を契機にそれまでの話題、あるいは情報を改めて捉え直すということが共通して行われているわけである。「そうですね」は、「もう少し正確に言うと」あるいは「それについて言えば」というようなパラフレーズに相当するような役割を果たしているとも言える。27、28の例は、ターンの途中に現れたものであるが、これがターン冒頭であれば、先行発話の話題なりを自身の考えによって捉えなおすということになるはずである。これはまた、そこから、改めて話題が始められるということでもある。この点は、「うーん」と比較してみるとわかりやすい。

29 2: (…) その話ちょっと長くなるかなー(1: 長くなる) うん(1: そうですか) だけど、あの、うん、だけど僕はいずれにしても結論がありますと、それは、あの一、牧師で職業がうーん、直接的に人が(?) 目にみえる形で(1: うん) うーん、役立ってはいないというような考え方は私はそれは間違っている、そうじゃないと(1: うん、うん、うん、うん) うん、僕は思うんです。(…)(RYm3)

この29の発話において、「うーん」は、発話の途中に現れてはいても、話題や情報の捉え直しというようなことはしていない。「うーん」が、同じ発話に複数出現しているのは、話題の捉え直しあるいは話題の始発というようなことをしないからである。29の「うーん」を、「そうですね」に置き換えると、発話は流れが不自然になる。それは、「そうですね」が一種の始発性を

持つからであろうと思う。

そこで、B類の性格を次のように考えることにしたい。

30. 「そうですね B類」は、先行する話題を受け、一度、その話題を改めて捉えなおした上で、自らの見解なりの表出を開始することを示す標識である。

ちなみに、フィラーかどうかについて言えば、フィラーの典型的なものは、取り去っても談話の内容に関しての増減がないものであろう。「えー」「あー」などは、取り去っても内容には影響がない。「うーん」もその点では同様である。しかし、「そうですね」類は取り去ることによって、発話内容がわかりにくくなると感じられるだろう。それは、「そうですね」が談話構造を形成する働きを持っているからである。次の例の「そうですね」を取り去ることはできない。

2 1: ああ、でもこれぞという 18 番はありますか？

2 a: これぞは、そうですねえ、スパゲッティは好きですけども (1: ああ) 色々作ります。

b: これぞは、スパゲッティは好きですけども (1: ああ) 色々作ります。

(NFm) (再掲)

さらに、あいづちの「そうですね」は別として、「そうですね B」がたとえば一つの発話内で頻出するというようなことはない。また、位置もほぼ話題単位の冒頭である。これらの特徴は、「そうですね B」はフィラーとは別物であることを示している。どんなに口癖のように多用されていようと (吉村 2000)、それは談話形成に必要な表現として使われているのであって、

表現の内容から見て不要なものとは言えない。(小出 2009)。

6. 「そうです」と「そうですね A類・B類」の関係

以上、「そうです」「そうですね A類・B類」についてその性質を見てきた。以下に、まとめの意味もかねて、それぞれの関係を整理しておきたい。

6.1 「そうですね」の「ね」

まず、30の仮説に戻るが、この仮説のポイントは、「そうですね」が発せられた時点では、話題が捉えられたことを示すだけで、内容については何も述べられていないという点である。「そうです」が、内容的な情報を与えることと対照的である。

「そうですね B」は、「そうですね A」が内容への言及を含むものだったのが、話題への言及と変質したものと見ることができよう。問題を認識しているが、その答えはこれから表示されるという状態、さらには、答えはまだない状態であることを示すものである。

「ね」がある形とない形 (神尾 (1990) にならって、直接形と間接形と言ってもいいかもしれない) は、情報の所属領域 (なわばり) の問題として現れる場合もあるが^{viii}、「ね」は必ずしも対人的情報領域に関わるものばかりではなく、自身の発話の処理とかかわる自己指向的な用法も持っている。

「ね」と似た性質を持つ「な」について言えば、独り言として現れる「そうだ」と「そうだな」という表現では、当然ながら領域性は関与せず、了解性の問題に変わっている。「そうだ京都、行こう」(JR 東海 2011) の「そうだ」は発見・気づきを示すものであり、心の中の空所 (問題部分) を充たす答えが見つかった瞬間に発せ

られる表現である。それに対して、「そうだ」を「そうだな」に置き換えると、後半も「そうだな、京都に行こうかな」というように、「京都に行こう」という決心が宙に浮いた状態、未決状態に置かれることになる。

「そうです」と「そうですね」も、先行文脈に対して、別の心的状態の表現として見ることができよう。4節でみたように、「そうです」と「そうですね」で答えられる質問が異なってくるのは、受け手の側の心的な処理が必要かどうかの違いがあるからであり、受け手の側に確認などの心的過程が含まれるときには「ね」が現れるのである。このときの「ね」は、対人的なものではなく、話者自身に向かう自己確認的なものであろう（小野・中川 1997）。その結果、とまどい、ためらいなどが表されることにもなる。「そうです」単独では了解を表現することになるが、「そうですね」という形は了解の表現にはならないことになるわけである。

6.2 2つの「そうですね」の共通点——まとめをかねて

このように考えると、「そうです」のA類とB類の共通点も見えてくる。それは、両者が持つ心的反芻の過程の存在である。A類では、回答に至るまでに先行発話の内容に関する確認、解釈、判断などの過程が想定され、B類では、「そうですね」の使用は心的表出過程と連動していると考えられる。

これまでの検討をもとに、「そうです」「そうですねA」「そうですねB」の性質をまとめると31のようになる。また、それを図式的に表したものが32である。

- 31 「そうです」「そうですねA類・B類」の関係
そうです : 先行発話を「XはYだ」

という判断と捉え、その判断を、情報的な観点で肯定する。正誤の観点が重視される。

そうですねA : 先行発話に含まれる判断について、自身の解釈過程を通した上で、その判断が許容できることを示す。正誤の観点は二次的になる。

そうですねB : 先行文脈を受け、その話題を捉え直した上で、自身の表出を行うことを示す。

32 「そうです」「そうですねA類・B類」の関係（図式）

「そうです」

[先行発話で示された命題についての正誤判断]（命題的）

↓

「そうですねA類」

[先行発話で示された判断についての許容]（対人的）

↓

「そうですねB類」

[先行発話で示された話題の許容と捉え直し]（談話的）

以上、「そうですね」という応答表現をめぐって、「そうです」との関係、「そうですね」内の用法の関係について検討してきた。しかし、ここでの検討は限られたデータと内省をもとに行われたもので、より広範なデータをもとに検証される必要がある。また、「そうですね」は、「です」が成立した後に可能になった形式であり、歴史的な成立の経緯がどのようなものであったか、さらには他言語でも同様の談話標識が存在

するだろうと予想されるが、実態はどのようなものか、これら通時的、通言語的な角度からの検討も、この稿での観察の妥当性を検証する手がかりになるだろうと思われる。課題としたい。

* 引用文献

- 内田安伊子 (2003) 『『そうです』という答えについて』『日本語教育』119: 41-50.
- 岡本真一郎・多門靖容 (2002) 『『そうです』型応答詞の使用の規定因』『人間文化』愛知学院大学人間文化研究所紀要 17: 392-379.
- 小野晋・中川裕志 (1997) 『認知科学』日本認知科学会、4(2), 39-57.
- 串田秀也 (2002) 「会話中の「うん」と「そう」——話者性の交渉との関わりで」(定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房)
- 小出慶一 (2009) 「現代日本語の意味・用法の広がりに関する記述的研究」『日本アジア研究』9: 1-38.
- 斉木美紀 (2008) 「談話分析から見る『そうですね』」『横浜国大言語研究』26: 60-45.
- 定延利之 (2002) 「『うん』と『そう』に意味はあるか」(定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房)
- 吉村浩一 (2000) 「『そうですね』の会話分析の枠組み——心理学とエスノメソドロジーからの検討——」『社会環境研究』(金沢大学) 5: 1-9

注

- i (NFm) などは、『インタビュー形式による日本語会話コーパス』(北九州市立大学) からの引用であり、コーパス中の資料名である。
- ii しかし、この表現は、TVなどで多く聞く機会があるために「最近」の用法のように思われるが、必ずしも最近になって現れたわけではないようである。次の例のように、明治期の小説にもみられる表現である。
- ・「それで盗難に罹ったのは何時頃ですか」と巡査は無理な事を聞く。時間が分るくらいなら何にも盗まれる必要はないのである。それに気が付かぬ主人夫婦はしきりにこの質問に対して相談をしている。
- 「何時頃かな」
- 「そうですね」と細君は考える。考えれば分ると思っているらしい。(漱石 (1905) 「猫」)
- ・消極的の新人と積極的の新人と、どっちが本当の新人か

と云うことになりますね」

「ええ。まあ、そうです。その積極的の新人というものがあるでしょうか」

微笑が又閃く。

「そうですねえ。有るか無いか知らないが、有る筈には相違ないでしょう。(…)」(鴉外 (1910~11) 「青年」8節)

これらは話しことばそのものではないが、背景に話しことばでの「そうですね」の使用があったと見ることは不自然ではないだろうが、通時的な検討は別の機会に譲ることにしたい。

- iii Yes-No疑問文、真偽疑問文などと呼ばれるものを、この稿ではこう呼ぶことにする。
- iv 以下、作例については特に作例であることを示さない。
- v 日本語教育では、「そうです」は、学習初期に取り上げられる項目であり、一般疑問文に対して「そうです」で答えることができるのは、述語が「名詞+だ」の場合に限られるというような説明が一般的である(たとえば、庵他 (2000)) が、これは、学習段階に合わせた便宜的なものであり、実態としては妥当ではない。
- vi たとえば、「(ゲームをしている相手に) 降参ですか?」「?そうです」という例が挙げられている。
- vii 宮本百合子(1924~26) 『伸子』2の1
- viii 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわばり理論』大修館書店など参照